共産主義者同盟機関紙
一九五九年十二月十日発行
編集 共産主義者同盟中央委員会
東京都文京区元町一丁目七番地
世界労仂運動研究所内
第二十九号 一部 十円

プロレタリア通信

万国の労仂者団結せよ!
革命的前衛・共産主義者同盟をすべての工場に組織せよ!

二七日の成果の上に全階級の総反撃を組織せよ!

革命的左翼の旗の下共産主義者同盟に結集せよ!

一一・二七国会デモが点じた、偉大な戦闘の精神は、日一日と全日本労仂者階級の隊列の中に、はげしくもえひろがつている。

わが同盟をのぞくすべての左翼政治指導部は、なんとかして事態を、「円満に」みせかけ、「平静に」収拾することしか考えなかつた。資本家と自民党はこの機とばかりに、日本労仂者階級の背骨に弾圧を加えてきていた。

ひとりわが同盟と、全学連と、革命的労仂者のみが、二七日に示された、両階級の火花の散る激突を、とことんまで拡大し、おし拡げる活動を進めた。

二七日の行動が「大したことはなかつた」などと敵にむかつて弁解するのは、まつたくの裏切りである。

国会内で小便することにいたるまで、あの日のすべての行動は、労仂者と学生の力が権力を圧倒し、その機能を部分的にマヒさせた一日なのだ。

この日発揮された大衆のおどろくべきエネルギーと戦闘力を理解できぬ者、その英雄的行動が、すべての労仂者におよぼした偉大な影響を、支配階級に国際的にも衝撃をあたえた事実を無条件に認めぬ者、それは口ではどんなりくつをならべようと断じて革命家ではない。完全にブルジョワのペースで推進せられ、カンパニア化した反対闘争のレールの上に固着されていた階級闘争のエネルギーは、二七日の行動によつて解き放たれ、決定的な前進の契機をきりひらいたのだ。二七日の行動は明らかに全情勢をはげしくゆれうごく流動的な局面にみちびいたのだ。

もちろん、われわれは、これが革命であるなどといいはしない。革命とは、僅か数時間のデモどころではない。それは資本家を武装解除し、収奪する行動なのだ。われわれは、あの日の行動を革命的行動と誤認するほどおろかではない。しかしあの日に示された被抑圧者の支配階級への明確な非妥協の精神、和解の余地ないことを知つたにくしみの精神が、指導者のおもわくをはみだして爆発したからこそ、支配階級は、「整然たる」闘争の百倍もおどろいたのであり、そして「手のつけようのない異端者」にたいする苛酷な弾圧にのりだしているのだ。あの日もし労仂者大衆が、指導者や敵の思うままに整然と国会に接近しなかつたら、たしかに弾圧はなかつたかも知れぬ。しかし同時に、なんの変化もない日がもう何日たつたことだろう。そして支配階級は冷静に自己の階級支配強化の政策を推進したことだろう。二七日に、断固たる行動を展開して、階級闘争に新しい流動の局面をきりひらくか、それともブルジョワ支配の安定な日日を続けることによつて敵の冷静な攻撃の強行を許すか、真に革命的立場に立つ者の方針は明かである。二七日によつて作りだされた彼我の対決の局面を緩和し、和解させようとするのではなく、裂目をひろげ、対立を一層拡大する方向で、プロレタリアートの階級的姿勢を固めねばならないのだ。「二七日の行動は敵のしくんだ挑発である」という考え、これは明かに事実に合つていない。あの日、敵権力は社共指導部との間に成立していた「国会に入らない」という取引にすつかり安心していた。しかし、労仂者が果敢な肉迫によつて、権力の隊列を圧倒しさつたとき、彼らは周章ろうばいし、そしてこの偶日への報復を考えたのである。

二七日の行動は「一部分子のせん動による偶発時である」という考え、これも徹頭徹尾誤つている。たしかに、全学連と青年労仂者を中心とした意識的な戦闘分子の存在なしに、あの日の行動はなかつたかもしれぬ。しかし、二万の労仂者大衆が、おそれず、権力の拠点をデモでじゆうりんしさつた行動が明確に示している支配の危機の開始を読みとれぬ者は、少なくとも革命運動に関するかぎり盲目である。

労仂者大衆の権力への火のようなにくしみと、明確な戦闘的行動への意欲がはちきれていたからこそ、革命分子のアジテーションはうけ入れられたのだ。闘争をおさえた浅沼、神山は大衆から見放されたのだ。労仂者大衆の中で起つているこの戦闘精神の蓄積を、挑発分子のせん動や単なる偶発時としか見えぬ者は、今後さらに生起するであろう偉大な闘争に、完全に自己の主観的な考えを思い知らされるだろう。

「労仂者の真に戦闘的行動は生産点でのゼネストであつてあのような街頭行動ではない」という考え。生産点でのゼネストこそ、資本の支配をゆるがす、労仂者の革命的闘争であるということこそ、われわれの主張であつた。だからこそ第八次統一行動が、真に階級的ゼネストに発展することをおそれて、それをごまかすために、社会党が国会デモをおし出した時、われわれは国会デモの持つ裏切性をバクロし、生産点でのゼネストを訴えたのだ。しかし事態の進行の中で、ゼネストを押えるために提起されたこの国会デモでさえ労仂者大衆の力によつて強力な行動に発展しようとしていることを見てとつた総評、社会党がなんとかしてこの国会デモも無力な形式的なものに押えようとやつきになつてきた時、われわれはゼネストのもつ革命的威力にはおよびもつかないとはいえ、政治の中心点で闘われるこのデモを強力な行動として闘うことによつて労仂者大衆の戦闘性を爆発させる機会とするよう訴えたのだ。「街頭デモより生産点での闘争の方が大切だ」今までゼネストを[illegible]定したものは一二・一〇の方針をめぐつてこういつている。われわれと日和見主義者と立場が入れかわつたのか?いや理由は簡単だ。[illegible]彼らはもう[illegible]がおそろしいのだ。大体デモ規制法もでないうちに自分でデモを規制するくらい敵に忠実な奴はない。

二七日の行動は、明確に、日本の階級闘争の劇的な進行の導火線としてとらえられねばならぬ。

いかに妥協主義者が、闘争にやつきとなり、闘う大衆をおさえつけようとしてもそれは所せん徒労[illegible]いだろう。妥協[illegible]い、むきだしの[illegible]決の時が迫ろう[illegible]の試み時、そのような[illegible]がいかに無意味であるか、それはすべての人の予想をこえて、急速に立証されるだろう。

階級闘争の論理とは、まさに、力の論理以外の何物でもないことが、事実をもつて立証されるに違いない。議会主義などという民主主義的ヴェールをふきとばして、両階級の激突が進行する時、あわれな[illegible]は、その存在の[illegible]を失うのだ。

三池での激突の[illegible]、[illegible]の前にすでに開始された公然たる政治的衝突、日本[illegible]の階級的激動はすでに開始されたのだ。

このような評価[illegible]共両党は、すでに[illegible]指導力をそう失[illegible]二七日に、それ[illegible]如実に証明した[illegible]る。両階級の[illegible]別なく妥協主義[illegible]追いこみ、[illegible]を深刻化する[illegible]共産党は、[illegible]の直接の[illegible]下部党員のつきあげにあつて、左の地すべり的分解を開始している。

何千という党員が歓迎して闘つた国会デモを「われわれは指導しなかつた」と敵にむかつて弁明を申入れる指導部、それは、正に、共産党が完全にその[illegible]をがい化し、解体したことを自認したにひとしい。

全学連は徹底的に闘う姿勢をとことんまで明かにすることによつて、その指導部が真に革命的部分であることを立証した。そして東京地評をはじめとした戦闘的労仂者が敏速に反撃への体制を組みつつある。

事態は、明らかに、二七日を出発点に、敵の攻撃をうちくだき、さらに全面的な階級的対決に発展させる可能性を労仂者階級にあたえているのだ。

現在、情勢は労仂者階級にとつて、偉大な明日の闘争の展望が開かれつつあることを、われわれはためらわずに理解せねばならぬ。

そのためにこそ、二七日の行動の一切を支持し、その革命的意義をみとめることをおそれてはならぬのだ。

中間層から一時的に離反するかもしれぬ、などと考えて、二七日の行動の意義をゆがめ、次への前進をためらうものは冷静な戦術家ではない。

現在、中間層からの離反を怖れずに、二七日の成果を守りぬく者こそ、やがてのつぴきならぬ対決に発展する日本の階級闘争の主人公となりうるものだ。

資本主義世界の中で、昨年、フランスで行われたあの両階級の激突は、今や日本における公然たる衝突への発展として進みつつある。

日本における階級闘争の帰すうは、全世界の階級闘争を決するものである。

全世界の階級闘争の焦点、日本の支配階級の攻撃にたいして、労仂者階級の強力な反撃を組織する任務こそ国際プロレタリアートに負つた、日本労仂者階級の偉大な使命なのだ。

このような任務の遂行なしに、いかなるプロレタリア国際主義もありえない。

わが同盟こそはこの闘争を真に指導しうる部隊であることは、激動の日の中で明確に立証された。だからこそ敵階級はわが同盟にむきだしの弾圧を加えてきたのだ。

だが、われわれはいかなる弾圧もおそれない。どんな苛酷な弾圧も、ただわが同盟をきたえるだけだ。一人の逮捕には一〇人の新しい同盟員のかくとくがこたえよう。いかなる条件もわれわれの活動を阻むことはできないのだ。

情勢は、十二月十日の第九次統一行動に労仂者階級が強力な行動に立ち上ることが労仂者階級にとつて決定的意味をもつことを示している。

それは弾圧をはねかえし、国会デモ規制法をぶつつぶす偉大な労仂者階級の総反撃の日として組織されねばならぬ。二七日によつて一変した階級闘争の状況は、弾圧粉砕闘争を焦点としてさらに、来年の安保改定調印にむかつて、急速に進行するだろう。

全労仂者階級の弾圧にたいする階級的反撃の組織によつて、二七日にきりひらかれた突破口をさらに拡大することこそ、われわれの闘争方針でなければならぬ。

第九次統一行動の具体的戦術はなにか?

それはすでに東京地評の労仂者が明確に提起し、全都連が全力をあげておしすすめている「方針労仂者のゼネストで、再度国会を包囲せよ!」だ。社会党、共産党総評はこの方針におそれをなし、何とか実力闘争の規模を低め、デモを国会に近ずけないよう画策するだろう。だがわれわれは戦闘的な労仂者学生とともに最後までこの方針を守つて闘いぬくだろう。一二・一〇の行動になにものもおそれず全労仂者階級が決起する時、それは支配階級をゆるがし、全階級闘争に決定的な前進の機会をあたえるのだ。これこそ、孤立の危機にあえぐ炭労労仂者の総反撃の機を作るものだ。

それこそ、二七日以後作りだされた流動的な階級情勢を決定的に有利にみちびくのだ。

わが同盟は、この闘争において、再び唯一の指導部としての輝しい旗を守りぬくだろう。

実力闘争で再度国会を包囲せよ!

全労仂者階級の反撃で、国会デモ弾圧をはねかえせ!

国会周辺デモ禁止法を、実力でぶつつぶせ!

炭労の合理化を、実力闘争で粉砕せよ!

安保改定調印を阻止せよ!

闘争の目標を明示する、このようなスローガンの下に十二・一〇を生産点での実力闘争として、さらに中央政治権力への対決として発展させねばならぬ。

十二・一〇は残念ながら、総評指導部の裏切り的な指導によつて、全階級のゼネストとはほど遠い規模でしかない。しかし、この日、炭労の二四時間ストライキを始めとして、始めて国鉄が公然たる実力行動に立ち上るのだ。

首都の周辺でも、十一・二七小西六につづいて、合化富士フイルムは二四時間のストライキに立ち上る。

ここ一年の間、完全に実力闘争を放てきすることによつて、資本家どものまくらを高くさせてきた国鉄が、東京三カ所地方二カ所であるとはいえ、明確な職場大会の戦術で闘うことは、きわめて重要な、労仂者階級の力量の不足を示すものである。

次第に政府、権力との対決を強めている全逓の闘争は年末に向つて、全闘争の軸としての位置を一層明かにするだろう。

そしてなによりも、日本プロレタリアートの最精鋭炭労は、一〇日をきして、新たな闘争の段階を迎える。

資本家階級は、総評炭労指導部が妥協的な階級的反撃で闘うことによつて、合理化攻勢をうちくだくのではなく、合理化にたいして妥協とかけひきできりぬけようとする態度に終始したために、徹底的に助けられた。

日本プロレタリアートの死命を制するであろう炭鉱労仂者への攻撃にあたつて、日本資本家階級は、最後まで労仂者を追いつめる決意をもつてしかも慎重な計算の上に攻撃をすすめてきたのだ。今年春からの炭労の闘争をふりかえつてみるとき、資本家の緩急合せた攻撃が見事にわれわれの戦線を分断してきたことは明かである。

指導部が徹底的な闘争によつて合理化を粉砕しようとするのではなく、敵のほこ先をかわそうと、一歩一歩退く方針をとつたことが、今日の三池の完全な孤立を生んだのである。少しづつの後退は層一層と敵の攻撃の重圧をましたのである。

中山あつせん案は、このような階級闘争の推移を総括する指標となつた。指導部があつせんに少しでも色気を示した時、中山は「生産秩序の確立」というしつぺがえしで、完全に資本家レドパージを合法化したのだとしている。職場活動家六百名を含む千六百名の首切りは三池の労仂者の目前に迫つたのだ。

炭労闘争の持つ日本プロレタリアートの闘争に対する決定的影響を理解できぬ者に今日の階級闘争を語る資格はない。炭労、とくに最精鋭三池への攻撃に敗れることは現在進行しつつある日本労仂運動の右翼的再編成を大巾に促進するだろう。それはかつて電産が消滅して、電労が形成された比ではない。

指名解雇についでロックアウトへと、資本家階級は有利な地点を利した、最後の中心的な突撃へとうつつてくるだろう。

日本プロレタリアートにとつて、状況はもう一刻のゆうよもできない。

国会デモへの弾圧に対する全階級の反撃を組織することによつて、敵の攻勢の中心点をうちくだき、情勢を有利に展開する中で、炭労闘争の勝利の道をきりひらかねばならぬ。

炭労と三池に対して無条件に、最後まで全力をあげて支援すること、これこそ今や全日本の労仂者階級の義務である。

すでに同盟北海道地方委員会は、全力をあげたオルグ活動に入つている。

われわれ共産主義者同盟は弾圧反対闘争の前進の中でとくに炭労闘争を全階級が無条件に支援する行動に全力を上げるだろう。

一二・一〇の行動が職場での実力行使と[illegible]て、闘われる時、それは必ずや全階級の偉大な階級的総決起への道を準備するものとなるであろう。

今こそ全階級は一二・一〇ストライキを防衛し、一二・一〇を徹底的に闘うことによつて、そして生産点での闘争を足場に、再度国会包囲デモを行うことによつて日本労働者階級の前途に新たな展望をきりひらくため全力を上げねばならぬ。

この闘争を推進する中で、何よりも重要なことは、真の階級的前衛、わが共産主義者同盟を強化することである。

一年前の十二月十日、われわれが活動を開始した時、われわれにあるものは、ただ、既成の政党からする攻撃と、中心的活動家の革命的熱情だけだつた。

しかし、この一年の間に、われわれは着実にその基盤を労仂者階級の中に築くことに成功した。[illegible]

日和見主義の洪水に革命的理論の大波をもつて答えよ

労仂者印刷所の活動を開始するにあたつて

革命的労仂者諸君に訴える

全労仂者諸君

われわれは諸君の熱烈な支援によつて、ついに労仂者印刷所の創立をかちとつた。

われわれはここに最初の活版印刷物を諸君の手におくる。

労仂者階級の前衛としてわれわれが活動を開始してから、すでに一年、『トロツキズム』『分裂主義者』などというあらゆる悪罵をのりこえて、われわれは進んできた。

われわれの活動は、すでに着実な基礎を労仂者階級の中にきずきつつある。

われわれは、確保された偉大な拠点、労仂者印刷所をわれわれの一層の前進のために、最大限に利用しぬくだろう。

国会デモへの弾圧により闘わずして敗北にみちびくための、資本家階級の攻勢は、日一日とはげしいものとなつている。

とくに三池の労仂者の[illegible]の上に、彼らは、安保改定をおしきり、彼らの支配をかためて、次の進出にうつろうとしているのだ。

日本の労仂者階級はこのような資本家階級の攻勢を、そのまま大手をふつて通らせてはならない。

徹底的な反撃の行動をおこすことによつて、資本家の支配をもゆるがすような強力で非妥協的な闘争を展開することによつて、彼らのねらいを封じなければならない。

われわれ共産主義者同盟は日本の労仂者階級がこのような力量をもつていることを固く信じている。

かつて、破防法を数次のゼネストによつて骨抜きにし、昨年の警職法を十一・五ゼネストでぶつつぶしたように、明確な指導があたえられず、自然発生的に闘つた時でも、日本労仂者階級は、資本家の攻勢をうちくだくことができたのだ。

国会デモを闘つた首都の労仂者への弾圧と日本労仂者階級の最精鋭、三池労仂者に加えられている現在の敵階級の攻撃を、指導部がためらうことなく、階級的な統一闘争によつて、妥協やボス取引に目をくらまされず、徹底的で非妥協的な闘争を組まねばならない。敵の攻勢の中心点を阻止し、さらに彼我の階級的攻防戦の焦点ともいえる安保改定にたいして、全階級の一大反攻を組織するならば、われわれは安保改定調印を粉砕し、石炭産業での合理化を粉砕する決定的に有利な局面をきりひらくことは完全に可能である。

安保改定を粉砕することに成功した時、日本労仂者階級はもはや昨年の警職法の後のようなぶざまな議会主義による妥協を許すことなく、岸政府の打倒から、さらに敵の危機の発展へ、事態を進めることができるだろう。

このような闘争を指導するもの、それはまさに、いかなる日和見主義にもおかされることのない、明確な階級的前衛、わが共産主義者同盟のみである。

社会党も、共産党も、昨年の警職法闘争で、見事な道学党としての本質と、大衆闘争の指導力の完全な欠如とをばくろした。

社会党は、資本家階級の名実ともに完全な手先き、西尾派の攻勢の前に、闘争への参加の姿勢すら失いかけている。

共産党は、あいかわらずの民族主義によつて、その誤びゆうを、日一日と再生産し、真の前衛たりえぬことを立証している。

わが共産主義者同盟の活動とその方針こそが、真に現在の階級闘争を勝利にみちびくものであることは、この一年の安保闘争の過程で無条件に証明されている。

すべての革命的労仂者諸君もはやためらうときではない、ただちに、すべての力をあげて、共産主義者同盟に結集せよ!

共産主義者同盟の旗のもと、明確な階級的前衛を組織せよ!

前衛の正しい階級的指導なしに、労仂者はみずからの解放をかちとることはできぬ。

闘争の前進のための、わが同盟の強化こそ、すべてを決するカギなのだ。

われわれ共産主義者同盟は、この目的のために、わが同盟の活動を数十・百倍とするために、全員死力をつくすだろう。

そのために、活動を開始した労仂者印刷所を、フルに利用しぬくだろう。

もちろん、印刷所の機能は、まだきわめて不十分なものである。それは、わずかの設備と、未熟な技術しかもつていない。

日本の労仂者階級の前途を決する階級闘争の戦機がせまつている現在、われわれはなんとしてもこの印刷所を拡大し一層充実せねばならぬ。

すべての革命的労仂者諸君!タバコ銭、フロ銭を節約して、わが印刷所の強化のために、資金カンパをせよ!技術あるものは、技術をもつて、この建設事業に着手せよ!

このような諸君の協力によつて、われわれは、はじめて、革命的理論の大波を、日和見主義とブルジョアイデオロギーで充満したこの日本に、わきたたせるであろう。ブルジョアどもをふるえあがらせ、日和見主義者を驚倒させるような、われわれの活動を展開しぬくだろう。

労仂者階級が、明確な革命的決意をもつて、行動に立上る時、それをはばみうるものはなにもない。

われわれが、どんな苦難をもおそれずに、前進しぬく時、未来はわれわれのものとなるだろう。

われわれは、ブル[illegible]デオロギーのあふれ[illegible]水の中で、労仂者[illegible]ずからの階級意識を[illegible]あげるためには、な[illegible]も、あらゆるにせの[illegible]識ー日和見主義ーを[illegible]さねばならないと[illegible]真の階級的前衛を[illegible]ためには、横行する[illegible]主義を一掃しなけれ[illegible]ないのだ。

「国際プロレタリアートの団結」と称して、アメリカ帝国主義者との闘争ばかりを考えて、まずなによりも自国の支配階級と、とことんまで闘いぬこうとしない民族主義、資本主義をぶつたおさねば、プロレタリアートは解放されない[illegible]ば目をまわす改良主義、一すばかり警官や会社の手先にもまれると悲鳴をあげて「挑発にのるな」などといいだす戦術上の日和見主[illegible]、こういつた思想は、も[illegible]労仂者にとつて無縁である。[illegible]資本家と労仂者の間には、絶対に和解の余地はない。資本家の支配をぶつたおすことなしに、労仂者は、商品として労仂力を売らねばならない、今のみじめな地位をぬけだせないのだ。

われわれは、労仂者印刷所を拠点にして、資本家権力に対する非妥協的精神と、社会主義革命へのごまかしのない理論を大量に送りだすだろう。

すべての革命的労仂者諸君!

日和見主義を戦列からたたきだし、革命的理論で武装した前衛を確立するために、今こそ共産主義者同盟を強化せよ!

労仂者印刷所を強化せよ!

三池の闘いを統一闘争へ

炭労三井鉱山労組三池支部にたいする指名解雇――活動家三百人のレッド・パージが、数日中にせまつている。日本労仂者階級の運命に重大な打撃を与えるこの闘いの意義を、多くの労仂者が感じとつている。

ところで、二七日の大闘争の直後、総評の太田と岩井は三池に飛び、三井鉱山栗木社長も三池鉱業所に向つた。栗木は、むろん「所員の激励と方針決定」のためであり、太田、岩井は、三池闘争の戦術決定のためであつたというが、二七日直後の決定的時期に、二人とも福岡にいつてしまつたことが、十日の統一行動を弱める社会党、総評の画策をきわめてやりよくしたことも事実だつた。

栗木は一日「若林所長以下元気なので三池にまかせて帰りたい。今後は、世論を味方にするために生産阻害者の実情を知らせたい」と発表、同日石炭経協に「一社重点ストにたいしてはストの失費を共同負担し、減産は共同でカバーする」という驚くべき階級的な決定の発表をしてもらつて東京へ帰つた。

同じ日、岩井、太田は、三池の灰原書記長らと協議した結果「敵が首きりを強行するなら、闘いは長びく。九億円を三池の半年分の生活費として送る。敵の挑発にのらぬようにし、短期決戦ではなく、いつでも闘えるという態勢をつくる」と発表した。これはいうまでもなく、炭労のあつせん案拒否後の「三池の[illegible]の二四スト、他五山は[illegible]の闘動拒否」という「[illegible]方針の上にたつた[illegible]この日の二つの[illegible]現在の炭労闘争の[illegible]機的な方針の[illegible]に現れている。

敵はまつたく階級[illegible]と対決している。[illegible]つては「活動家の[illegible]をのぞいたあつせん案など論外であり、日経連[illegible]事は、あつせん案に最初から「業務阻害者排除をボカしている」と反対していた。資本家の中でも東京銀行の工藤昭四朗などはあつせん案に賛成して「[illegible]ろといつていたが、これは資本家の中では立ちおくれた分子であり、全資本家が要求したのは、「あつせん案」というような一定の力関係の中でのより有利な調停ではなく、一切の秩序のヴエールをかなぐりすてても炭労に決戦を挑むことだつた。彼らの宣伝の重点はすでに「石炭危機」から、「生産阻害者の実情の宣伝」に変ろうとしているのではないか?

しかし炭労と総評は、この事態のもとで、階級的な闘いを、統一闘争をよびかけているか?あらゆる困難を突破して、さしあたりは産業別の、そしてさらに全労働者の統一闘争をくむことこそ対決の途なのだ。

この期間でさえ、雄別の企業闘争があり、炭労の期末手当要求があり、そして国会周辺デモ禁止法という、警職法につながる大悪法があり、安保闘争があつた。

統一闘争!これらの敵が出している目標を三池の闘いにむすびつけ、階級的大統一闘争をつくりだすこと、それが労働者階級の義務であり、これをさけるものは裏切者だ!!

さらに日刊紙めざし全力をつくせ!

印刷所は建設の第一歩をふみだした

日本共産党は一九三二年四月「赤旗」を活版化するとともに、「卒先して赤旗日刊期成カンパーニヤを起せ!」と非合法下で党機関紙の活版化を呼びかけたのであつた。

『全国の革命的労仂者貧農諸君!

日本共産党の中央機関紙「赤旗」が、ここに生まれた。決死の覚悟をもつてブルジョワと闘争する革命的前衛なくして、労仂者階級の勝利はありえない。日本プロレタリアートの最も優秀な、最も戦闘的な前衛分子の革命的隊伍たる日本共産党は、過去七年にわたり常にあらゆる闘争の先頭に立つてきたが、今日はじめて、この「赤旗」を通じて大衆の前に公然現われ、プロレタリアートの厳格なヘゲモニーの下に、全勤労民衆のあらゆる革命的闘争を指導し組織する任務を最も勇敢に遂行せんとするものである・・・』

一九二八年二月一日発行の「赤旗」創刊の辞はこのような革命的なアッピールを天皇制テロルのもとで勇敢に闘つている日本プロレタリアートに発した。

日本共産党は創立以来の戦略上の混乱と天皇制テロルの重圧と宗派的争いにもかかわらず、非合法下の緊張した、厳格な規律のもとにおいて革命的情熱を保ち続けた。われわれはそれを戦後復刻された「赤旗」の紙面から読みとることができる。

現在の「アカハタ」は戦前の「赤旗」の伝統を受け継いでいるとはいえ、皮肉にも三二テーゼの二段階革命論を戦後まで後生大事にかかえこんでいるのとは全くうらはらに、創刊の辞に見られるような革命的パトスと戦闘的、プロレタリア的伝統をおしげもなくなげすててしまつた。「アカハタ」は戦前の「赤旗」(せつき)から読みあらためられた名であるごとく見るもはずかしい大衆追随主義、[illegible]である。またアカハタには、民族主義の宣伝機関であり、プロレタリアートの闘争を不断に阻害する以上のなにものでもない。今や、われわれは、この新聞の中に一片の革命的言葉も、真に大衆闘争を徹底的に闘いぬく決意もみることができず、「社会主義」の偉大な勝利の宣伝と、総評(社民)への讃辞と、平和、平和、平和、二十年党員(十年党員ではないの)(経験主義、手工業的活動の見本、百年前と変わらないかびのはえた、この部分はいいがあの部分が悪いといつたような文芸評論と「哲学」(といえるなら)論文しか見出すことができない。そして、これらが全くばらばらになつてしまうのを強固にふせいでいるのは、それこそ、官僚主義である。

わが共産主義者同盟は、この改良主義を断乎として粉砕し、日本の革命的労仂運動の伝統を守り、決定的闘争の前進をかちとるため全国政治新聞の創立を訴えつづけてきた。レーニンに率いられたロシヤ共産党は一九一二年ツアーのテロルのもとで「プラウダ」を発刊するとともにただちに『日刊』をかちとつたのである。

日本共産党も、天皇制テロルのもとで「赤旗」を活版化するとともに、日刊に向つて文字どおり決死の闘いを闘つたのである。しかるに、わが同志の中にはわが中央機関紙を日刊にまで発展させる必要はないという人がいる。たとえ現在われわれが機関紙の活版化さえかちとつていないとしても、われわれ自身の強力な闘いの武器をもつて、労仂者を単一の階級として強固な意志の統一のもとに結集し、生きた階級闘争の中で一瞬一瞬闘いぬくためには、できることならラジオからテレビジョンにいたるまでの宣伝手段を獲得すべきである。そして、われわれの現在の活動を単なる、代々木反対派や左翼反対的地位にかぎるのではなくて、当面「アカハタ」の十倍も強力な日刊紙の確保をめざして、不眠不休の努力をしなければならない。非合法の時代にわが先人たちがなしえた事業を、このプロレタリアートの闘いによつて勝ちとられた合法の時代にわれわれがのりこえられないとすれば、足りないのはわれわれの革命的熱情と決意である。

われわれは、政治新聞の発刊という偉大なる成果に甘んずることなく、ただちに、その日刊化を目指して前進せよ!と訴える。

現在までの政治新聞発行カンパ全国遂行状況次のとおりである。

北海道	二一%
東北	三%
関東	五%
東京	一三%
北陸	二%
東海	三五%
関西	三一%
九州	二二%
大口カンパ合計額	十二万円

各地方委員会は、さらに全力をあげて完遂に向つて進め!!

機関紙名大募集!

労仂者印刷所の確立とともに、われわれはただちに、全国政治新聞の発刊をかちとらねばならない。

労仂者階級を一[illegible]の日和見主義から解放し、解放闘争を進めるもの、それはレーニンの教えたごとく、正しい政治方針と、それを遂行する革命家の結集と、全国的政治新聞である。

闘争がはげしいからこそ、われわれはあらゆる力をあげて新聞の発刊にとりくまねばならないのだ。

共産主義者同盟はこのため来春一月一日を期して、全国的新聞を創刊することとした。当面は月二回刊とし、旬刊から週刊を早急にかちとる目標である。

革命的労仂者諸君が、この目標にむかつて、さらに協力されることを期待する。

とくに、新聞の死命を制する紙名については、革命的で創意的な名前をつけたい。

十二月十日までに、文京区元町一の七、世界労仂運動研究所内 全国政治新聞発行準備委員会へ、紙名を考えて送つてくれ。

〔表から続く〕

全国の最重要経営に確立されたわが同盟の細胞と、日本共産党の右翼的クーデターを粉砕して、一層その力量を強化した日本学生運動は、今後の日本革命運動の強力な推進者となるだろう。そして、一年の試錬の中できたえられた多数の職業革命家を中軸に、わが同盟は真の階級的前衛を建設するために全力を上げるだろう。

もちろん、われわれ達成した成果は、情勢がわれわれに要求する所に比べれば、まだきわめて微弱である。日和見主義の潮流はまだ強く日本労仂運動を支配しており、その中で、敵階級からの全面的攻勢が開始されているのだ。日本労仂者階級のもえたぎる階級的戦闘力が屈服された時、われわれがすでに獲得した組織的成果は、きわめて微弱なものとしかならないことだろう。開始された資本家の全面的攻撃の中で今こそ、真の階級的前衛を労仂者階級の中に組織せねばならない。一年の試錬にきたえられた中央委員会を先頭に、わが同盟は、この目的に向つて、さらに勇飛するであろう。